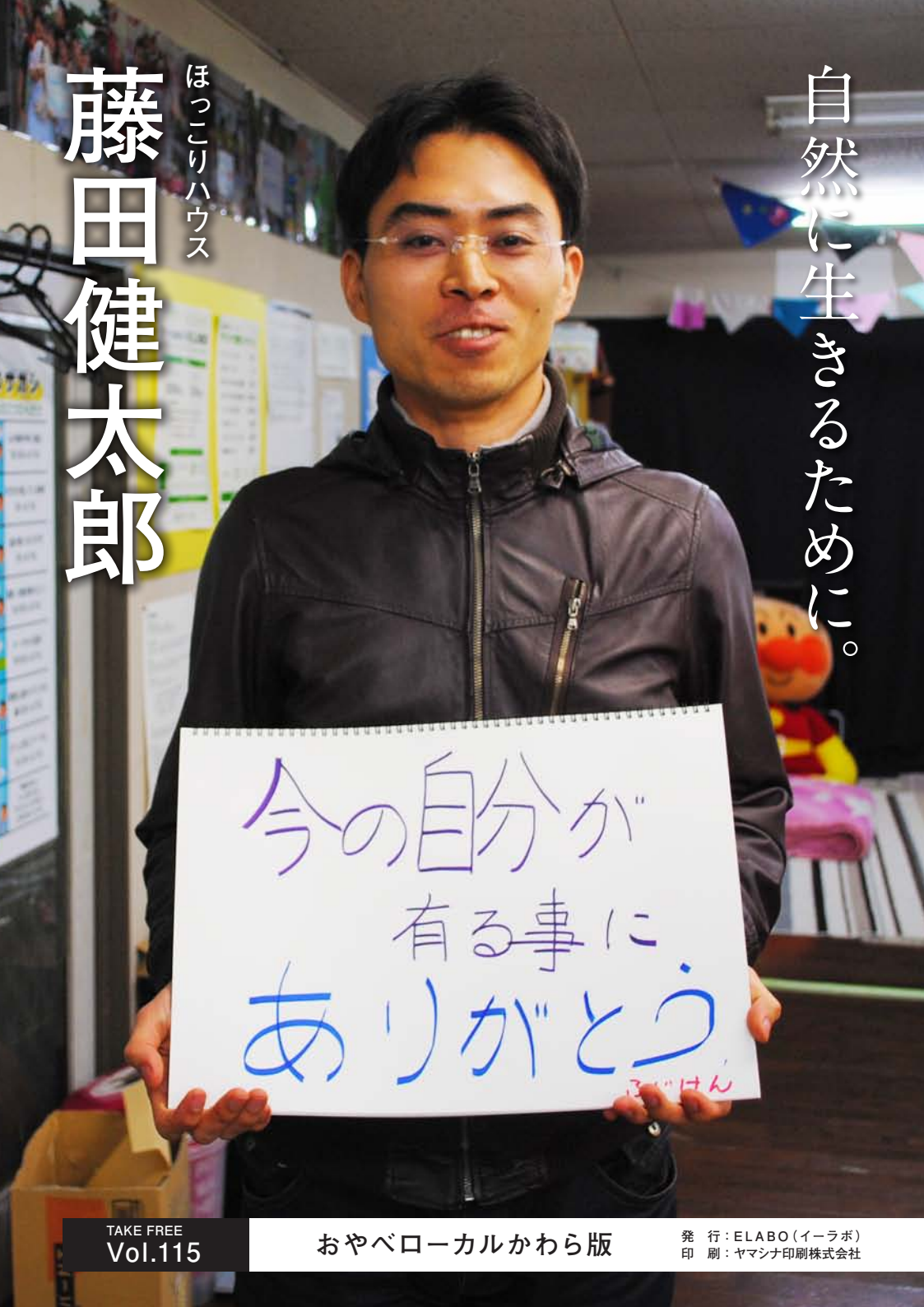


自然に生きるために。

ほっこりハウス

# 藤田健太郎



今の自分が  
有る事に  
ありがとう

TAKE FREE  
Vol.115

おやベローカルかわら版

発行：ELABO（イーラボ）  
印刷：ヤマシナ印刷株式会社

小矢部で新しい試み始める医師がいる。藤田健太郎さん。今回はこれまでの流れとこれから小矢部で何が始まるのか。紙面の許す限り紹介します。

「東京では、朝から晩まで仕事をし、気付いたら1年が経ち、2年が経ち…あつという間に5年が経った。」

自分の知らないことがどんどん分かる。パズルのピースをひとつずつ埋めていくような感覚。

「あ、これをやっていけばどんな病気でも完治するんじゃないか?」

そう思える時期もあった。しかし、31、32歳くらいから医療が楽しくなくなる。



患者を診る時間より、コンピュータに向って文章を書く時間のほうが多くなった。

レセプトと言って、病名に対して、なぜこの薬を使ったのか。どの検査でその病気だと言えるのか。それを証明しないと医療費は落とせないうからと。システムと想いの板挟みが始まる。

病理（人の身体を診ること）を半年間経験した時、身体の美しさに感動した。

例えば肺の組織は、非常に綺麗に枝分かれし、本物の木の枝のように見える。心臓の血管も、まるで川の流れるように綺麗に蛇行して無駄がない。骨も、軽石や岩石のよう。

「これを見た時、人間の身体も自然なんだと思った。」

呼吸器科に入った時、学会の基調講演で「シノ呼吸法が紹介された。

目の前で、「気」の力を使い人が飛ぶ。

「こういうものが世の中にあるなら見てみたい。」

そして講師をされた先生の所へ2年くらい通う。他に、ヒーリングや自己治癒力など自分たちの知らない世界を考えた時、自然の法則がなんとなく見えてきた。

●どこまで医療をやればいいのか。

●死の定義とは。

この定義が曖昧で、医師がひたすらできることをやるとなった時、辛くなるのは患者、家族、そして医療従者。「患者と向き合うことよりも、システムで悩むことが多くなった。」

「西洋医学を否定しているわけではない。自分の分野で何ができるか考えた時、医療の裾野を広げることで崩れたバランスを少しでも整えることができるんじゃないかと。」

現在、医療の道は西洋医学一本しかない。病気になるたら救急車を呼ぶ。

最初に無料相談所みたいなところで「ここが良いか」「あそこが良いか」と道を聞く余裕がない。最初から道が一本に決まっている。そこに問題があるのではない。

「これまで感じたこと、経験したことを通じて、自分がどういう医療を展開していきたいかというところ、シンブルで。誰にでも出来て伝えていけるもの。食べ物考え方、運動呼吸法…、自然の中にあるもの、そこから離脱しないもの。」

「目の前で苦しんでいる人がい

て、その人を助けたいという気持ちは勿論ある。しかし、違和感もある。」

この違和感はどこから来ているのか。自然の法則に照らし合わせた時の違和感じゃないのか。じゃあ、自然の法則とは一体なんだろう?」

自然とは、循環して自立している。非常にシンブルだが、多様性がある。地球上の水の大循環。人間の身体の中のバランス。生まれてから死ぬまでの時間。

「少なくとも、食べ物とエネルギーと医療が自分の中で循環して自立できれば、ある程度人は不安が無くなると思う。」  
「そこで、ほっこりハウスというものを考えています。」  
動き始めます。

■藤田健太郎

1978年4月6日生。

医療の分野で、多くを人に頼る事なく、自分で自立、循環していきける世の中を作りたい。ただいま行動しながら、やり方を模索中。医療と食糧、エネルギー、住居、衣類などの自立、循環とは密接に関わると考え、他分野とも交わる事で大きく進めそうです。同じような事を考え、すでに行動している仲間に出会えたら嬉しいです。